

芭蕉さんと利一に想いを馳せて

伊賀市

柘植町、野村界限

伊賀市北東部に位置する柘植町周辺は、日本文学史に名を刻む2人の偉人ゆかりの地です。一人は、俳聖・松尾芭蕉（1644～1694）です。現在の伊賀市内に生まれ育ったことから、ゆかりの地は市内に数多くありますが、柘植の町にも深いつながりを物語る場所があります。

そしてもう一人が、大正から昭和にかけて活躍した小説家、横光利一（1898～1947）です。明治44（1911）年からの5年間、県立第三中学校（現在の県立上野高等学校）に通った利一は、同37（1904）年からの4年間を東柘植村（現在の野村）で過ごしました。地域には、当時の様子を偲はせる公園が整備されています。今回は、芭蕉さんと利一に想いを馳せながら、柘植町から野村界限を歩きます。

取材・文：中村 真由美



JR「柘植」駅



「柘植のホント!かるた」第2版



元柘植病院のレンガ塀



16 温もりが伝わるレンガ

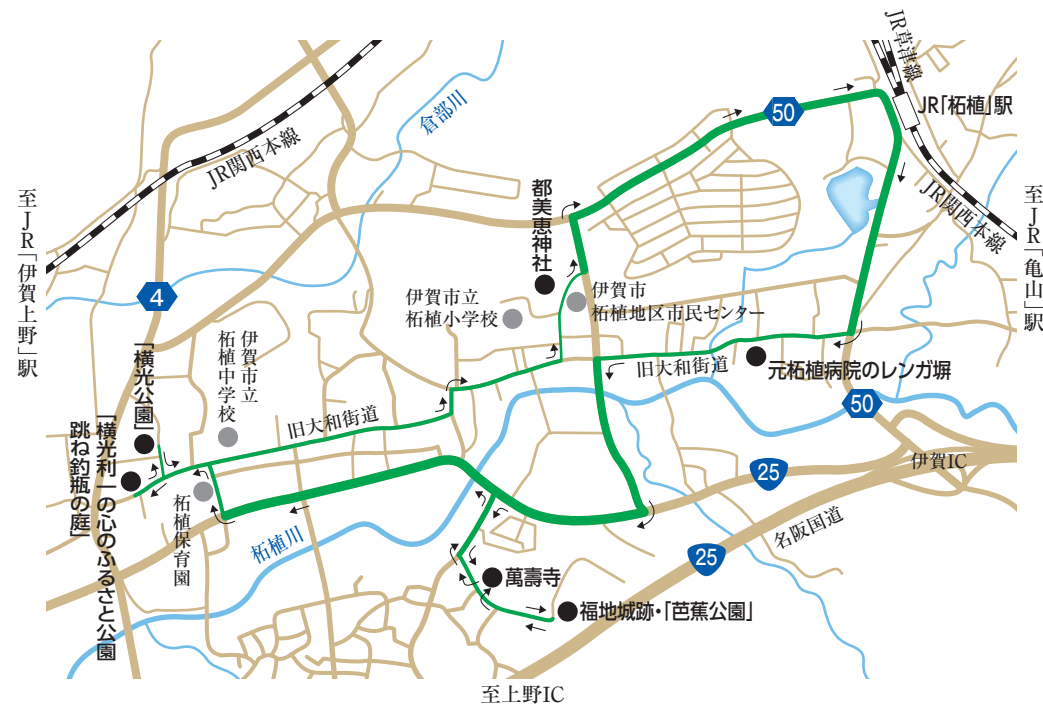
三重県最初の鉄道駅と利一の関係

今回の散策は、JR「柘植」駅から始まります。現在、JR関西本線と草津線の接続駅としての役割を果たす同駅が開業したのは、明治23（1890）年2月のこと。同21（1888）年に設立した関西鉄道会社が、四日市・草津（滋賀県）間の鉄道敷設工事に着手した中で、県内では最初にできた鉄道駅でした。以来、乗降客を見守り続けた駅は、昨年、開業130年を迎えました。これを記念し

て、郷土市民グループ「ランプの会」と「柘植地域まちづくり協議会」が、「柘植のホント!かるた」第2版を共同作成。駅舎前には「県内で最初に出来た駅」の絵札を紹介したパネルが設置されました。

この鉄道敷設工事の中で最も難工事だったのは、「柘植駅」と「加太（かた）駅」を結ぶ加太トンネルでした。実は、横光利一の父・梅次郎は、同工事に携わった土木技師でした。工事期間中に柘植に滞在したことが縁となり、利一の母・こぎく

と結婚。その後、利一は福島県で生まれました。またが、父の単身赴任中に、母の実家があった野村で、少年時代を過ごすことになるのです。なお、同トンネル工事のために大量のレンガが作られました。中には不良品もありました。町内を散策すると、この不良レンガを利用した塀を複数個所で見かけますが、中でも見ごたえがあるのが、元柘植病院のレンガ塀でしょう。JR「柘植」駅を後にして15分程度歩いた住宅地の中にあります。色や形が多



行程図	所要時間／約2時間30分	※所要時間は、おおよその目安です。
START		
JR「柘植」駅	約650m	元柘植病院のレンガ塀
	約1.8km	福地城跡・「芭蕉公園」
	約100m	萬壽寺
	約1.5km	
	約1.0km	都美恵神社
	約1.3km	「横光公園」
	約200m	「横光利一の心のふるさと公園」
		跳ね釣瓶の庭



「横光利一の心のふるさと公園
跳ね釣瓶の庭」



不良品レンガで造ったモニュメント



『洋燈』をモチーフにしたモニュメント



都美恵神社

右手に見えた後、さらに西へ歩くと、野村の住宅地に入ります。その一面に整備されたのが「横光利一の心のふるさと公園 跳ね釣瓶の庭」です。ここは、利一が明治37（1904）年からの4年間を過ごした屋敷跡。同園正面には、利一が好んだ将棋の駒をモチーフにした石碑が建ち、園内には水を汲んだ跳ね釣瓶も復元されていました。

園内に設置されたパネルの説明文を読みながら、少年時代の姿を思い描いた後は、「横光公園」へ向かいます。同園は、生誕100年を記念して野村地域の人が整備したもの。園内では、元柘植病

院のレンガ塀の一部レンガを譲り受けて造ったモニュメントや、小説『洋燈』をモチーフにしたモニュメントなどが見られました。

「初めて私がランプを見たのは、六つの時、雪の降る夜（中略）母につれられて東京から、伊賀の山中の柘植といふ田舎町へ帰ったときであった」。

右は、『洋燈』の一節です。利一は、柘植の町で出会った母の姉妹たちの温かな人柄などを綴った『洋燈』執筆中に倒れ、帰らぬ人となりました。昭和22（1947）年のことでした。父の仕事の関係で全国各地を転々とした利一にとつ

問 伊賀市柘植地区市民センター
TEL 0595-4518880

柘植の町と利一の縁を知った後は、芭蕉ゆかりの場所2か所をめざして、南へと歩きます。先に訪ねたのは、中世に福地氏が居城にしていたとされる福地城跡（県指定史跡）です。福地氏は、柘植地域の有力な国人（在地性の強い領主層）でした。野面積みの石垣や土を掻き揚げて築かれた土塁などを眺めながら奥へと進むと、広場のような空間が出現。芭蕉の句碑や記念碑など大小さまざまな石碑が並んでいます。ところで、なぜ

ここに芭蕉ゆかりの石碑が揃っているのでしょうか。伊賀町芭蕉翁顕彰会編纂の『伊賀町の芭蕉さん』などによれば、芭蕉の先祖は福地氏の一族だったといわれます。こうした縁から、地域の人々が城跡を整備して「芭蕉公園」と名付けたのです。明治43（1910）年のことでした。

なお、芭蕉生誕360年を迎えた平成16（2004）年には、城跡入口手前にメモリアルパークも完成。記念モニュメントの足元には、旧伊賀町の小・中学生や、山出区の人々が詠んだ俳句を刻んだ陶板581枚が敷き詰められています。

「ふきのとう 春が来たよと しらせた

よ」「あちこちで オークストラだ せみの声」などの句を目にしていると、思わず頬が緩みます。

続いて、近くの萬壽寺へ立ち寄ります。同寺は松尾家の菩提寺で、芭蕉の墓碑が静かにたたずんでいます。毎年11月12日には芭蕉の遺徳を偲んで「しぐれ忌」が行われます。

芭蕉さんへの想い溢れる 城跡と萬壽寺



福地城跡の石垣



「古さとや 臍（へそ）の緒になくとしの暮」
の句を刻んだ芭蕉句碑



陶板が敷き詰められたメモリアルパーク



芭蕉の墓碑